

本 も の の 日 本 の 学 校 <sup>(※1)</sup>併設中学校第2回卒 阿 部 良 子 <sup>(※2)</sup>

あの忘れられぬ終戦を迎えたのが、中国の黄河の南の開封、高等女学校1年の夏休みだった。昭和21年3月、命からがら着たまの姿で母の故郷相馬に帰り、一家はお世話になることになったのである。

親戚の家はどうやらおちついて、いざ学校にというとき、学校は新学期に入っていた。相女の方では、開封の女学校の在学証明書が必要というのですが、半年がかりで引揚げてきた者には、どこでどうなったかそんなものはなかった。

とりあえず来春の入試までと山上小学校の高等科に入学した。当時の校長先生が、中村高女に問い合わせたところ、「引揚者に在学証明書は無理」と、中村高女松田<sup>(※3)</sup>校長先生のご配慮で、一足おくれの入試を受けさせていただき、勉強できたのは校長先生の教育愛によるものと深く感謝している。

とはいえ満足な教科書もなく、教材もない引揚のわが一家には、女学生らしき着物もなく、引揚者配給の進駐軍払下げズボンをはき、教材用の布の代りに紙をはりつないで、それで和服の裁ち方を勉強した。

あわれなこの生活のなか初めて手にする農耕具をリヤカーに乗せ、佐藤信雄<sup>(※4)</sup>先生を先頭に皆で畑まで歩いたあの道、今考えるとどこだったのだろう。相馬の西も東も知らない私にとって、農村の風景はとても新鮮だったことだけが、なつかしく思いおこされる。

片道8キロメートルのデコボコ道を歩いて通学、家では代用食作りの手伝いに追われる毎日だった。

勉学に励んだという実感の乏しい私は、『母校の思い出』をと聞かれたら、古く小さいながらも、よく磨きぬかれた校舎と玄関のところの杉の木である。

それは東京生まれで中国育ちの私にとって、あの校舎のたたずまいに本当の日本の学校をみた思いがして忘れることができない。

(※1) 『相中相高百年史』 (1998 (平成10) 年7月6日発行) 「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 大西。東京出身。昭和24 (1949) 年卒。

(※3) 松田 一。中村出身。相中第19回、大正10 (1921) 年卒。法大。相中教諭：昭和7 (1932) 年～昭和16年、国語。  
中村高等女学校教諭・校長：昭和16年～昭和23年。相高教諭：昭和25 (1950) ～昭和33年、等。

(※4) 農業。

## 回想 - 国敗れても - (※1)

### 第26回卒 武林 リツ (※2)

昭和21年から24年春の卒業まで、二宮尊徳先生の報徳精神が生かされている、中村高等女学校で学ぶことができた。終戦直後の旧制の高等女学校最後の生徒だった。

以前、祖母から聞いていたが、この女学校は良妻賢母型の教育をするので、女の子として身につけなければならない裁縫とか礼儀作法を教えてくれるよい学校だからとあって、私が入学するのを大変喜んでくれた。

当時をふり返ってみると、入学した頃は、終戦で物の不足な時代のため1年の頃の出来事が強く印象に残っている。服は小学校の時に着ていたセーラー服上下を全部ほどいて、ヘチマ衿の制服に仕立て直したものだ。通学用の靴は、母の帯芯をほどいて型をとり、それでも飾ろうという気持ちがあったらしく、帯の靴のへりに母の着物が緑色だったので、端を少しもらい細く裁ってふちどりをした。それを古靴の底に縫いつけたのをはいた。世の中全体が貧しくて生活も楽ではなかったものでぜいたくは言えなかった。

教科書は、今の新聞の中に入っているチラシの紙より悪く、うすっぺらで表と裏がはっきりしており、裏は特にザラザラ。2カ所位ホッチキで止めただけの、ごくお粗末なものを使っていた。でも、まれに制服などの配給があった。学校に2~3点も来るとくじ引きで当たった人だけが買うことができた。

校舎は古校舎の東側で、今の市民プールの北側にあり、細長い平屋の校舎だった。昇降口の下駄箱のすぐ東はタタミ敷の礼法室。そこの床の間には、報徳訓が掲げられてあり、そこで授業のある時は全員で報徳訓を朗読したものだ。

#### — すぐれた先生方 —

この教室の隣が1年3組で、後から増築したあかるい教室。担任は赤井忠先生で英語担当だった。日本語しか知らない私にとって、初めての英語はめずらしく、興味をもって勉強にはげんだ。

赤井先生は「あんたたちどんな本を読んでいるか?」「文学書を読んでおくことも大切。」「よい本をしっかりと読んでおくように。」といわれた。それにこたえて私の最初の出会いは夏目漱石の『坊ちゃん。』次はモーパッサンの『女の一生』こうして私を文学に近づけて下さった先生でもあった。誠に感謝にたえない。

2年生になり教室は古校舎になった。担任は島田繁先生で音楽担当。戦後はじめての修学旅行があり旅行先は松島。旅行に行けるといっているのでとてもはしゃいだものだ。松島観光ホテルではうれしさのあまり眠られず、いつまでもおしゃべりしていて、先生に注意されたり今でも楽しい思い出である。

期末試験の終わった安堵感・開放感から、よく映画を見にいったものだ。小遣いをためておいては仲よしの友とでかけた。3年生になって荒静江(現松田)先生が担任。裁縫で着物を仕上げるのは大変だったがよく教えてもらった。先生は以前中国におられて、教えた生徒の手紙の話をよく聞かせてもらった。

洋裁は曾根リキ<sup>(※3)</sup>先生。3年生は卒業学年なので自分の背広を縫うのだ。教材に買い求めた生地はホームспан。縦と横の糸を荒く織り上げたものだけに、しるしをつけるにも、縫うのにも、大変苦勞したことは忘れられない。それでも結構自分で着れるようにできて何よりの喜びだった。

この外松田一<sup>(※4)</sup>校長先生、社会(当時公民)の佐藤卓実先生、物理(当時の物象)の鈴木先生。家政渡辺知賀子先生、物理の佐藤信男先生、数学の鈴木勝美先生、木幡豊先生。国語は荒井俊一先生、歴史が松崎<sup>(※5)</sup>先生、図画の白井キヨ先生、生け花の松岡<sup>(※6)</sup>先生と、皆忘れられない。

3年間の女学生時代を送った校舎は、今はなくなっても、そこに校歌の入った碑や二宮尊徳先生の像もたっている。あの学び舎は、相馬市立図書館・体育館・プールと形こそ変わっても、立派な市民の学習の場になっていることは力強い限りである。

いまここを通る度、相馬伝統の報徳の訓えを身につけることのできた私は幸せであった。国敗れでも残るこの精神をぜひ後世に残したいと思う。

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 佐藤。中村出身。昭和24(1949)年卒。

(※3) 旧姓 横田。福島県相馬高等女学校(→相馬女子高等学校→現 相馬総合高校)第14回、大正14(1925)年卒。

(※4) 中村出身。相中第19回、大正10(1921)年卒。法大。相中教諭：昭和7(1932)年～昭和16年、国語。

中村高等女学校教諭・校長：昭和16年～昭和23年。相高教諭：昭和25(1950)～昭和33年、等。

(※5) 松崎道貞。

(※6) 松岡勝。